



新橋忍草 上

5
1718
1



門別
1718
第卷

宋



水重結浮た鳥をまゝも
ゆりぬる



少いやうとちりしゆふ大路の道へ

志きくしゝるもおくまゝ色蕉翁

一流のまゝいゝ水も津や海は経のおと

うけよかゝい久もゆれゝ萬葉系に

邦へ又神ふあけ仙もそはかゝるら

たかこゝあゝもいゝゆゝゝ人橋のまゝい

と成来きより学ふる者生きたるに滞り
おほくおほく鳥羽玉乃くくきたるに滞り
方此光里の地を移れしとくおほく
留五七五の詞もいやはやとて
此境に到りてはもたぬ友一具
祖翁のみなまをさしよは五七五の
とて

もく句の計りもや肩ぶるを牛に汗
くくくくくくくくくくくくくく
めおほくおほくおほくおほく
達なるもくくくくくくくく
らは筆一紙なりとておほくおほく
りくくくくくくくくくくくく
そは生涯のつはは妙ありとて

ふも墨田川の水中より一石しなれど
種子書しん流きし十たんいあまら
在京のころも嵐山北と流きくあま
おとをいふあし一切種子年
ふとふれく讀路めしき世俗の
及まら流きしあまたあれとあまら
もと幣かたに社恩を此後句集ふい

るうせむしとあまらこの数けうちふし小磯
乃目のかあまらと拾う老あめとあまら
ふい波乃流魚の個をいふとあまら
ふい流きしあまらとあまらとあまら
目しつふもふい流きしあまらとあまら
初編をいふとあまらとあまらとあまら
志しつふと初花をいふとあまらとあまら

免ぬ夫れゆしと河心人かき不
りしと茶ふの死とてまゝに
とよし心とちとて法

あぬ二年十月

為雅尾由記

新橋思藤春之部

歳且之始

元日と横舟と茶のつたての始

草尾

元日と生飯之法と茶と藤との始

過日庵祝辞

冬をたまたま終て春来るに河心人

来てきつぬまあしあきまをまてはき
さふまおのつらきまに籠りてあきまを
菊物に此ころりあふは日まもり
ぬ人の風情の道に持ふてい解るる
さつにも覚束れし—程細法師の吾
あよまれふは疎し—紫は海ふ
あたらしめの乳は香なり—雪は往
来三千五百七年の暮瞬息あふら
帰らぬまはあしあきまをまてはき

と安し—うらまのあはれはき
又あふまはれし—志あふはあき
隼山鄭の月花風雅はゆきを
—たふはあきまをまてはき
うらまのあはれはき—あきま
ハ往らぬまのころりあふは日まもり
まはるる—あきまをまてはき

韶光の祝辭
をこめ口こめくしつ海十の十十
舞(吉)つとるもまたさし

明く身之安元日まきり男里もたさ
暮や水き元日二日三日の形

辛丑元旦

六十年未明途為明窓淨几
曉天新香煙断安安らう後

是蓮華社裏人

月、あゝあゝ一欠く春城色はわ
年 阿あうと際あゝあゝの正十の九

人西にまゝいささく己を築く
こ随ひうしこ成めさるるさし
るま水生のあゝあゝ一國をさ
治め采配揃ふ(ま)七も出さるる
さけしと臭しうらひあゝ城

仙集かきしる阿あていなあ〜あ〜あ
 うま三歳をううい際る光りきたた
 至我の心すら思ふはあ〜あ〜あ
 ち〜ち〜あ〜あ〜ああああああ
 け〜あ〜あ〜あ〜あ〜ああああ
 の清くか〜あ〜あ〜あ〜あ〜ああ
 ち〜あ〜あ〜あ〜あ〜ああああ
 あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜ああああ

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜ああああ
 ち〜あ〜あ〜あ〜あ〜ああああ
 ち〜あ〜あ〜あ〜あ〜ああああ
 ち〜あ〜あ〜あ〜あ〜ああああ
 ち〜あ〜あ〜あ〜あ〜ああああ
 ち〜あ〜あ〜あ〜あ〜ああああ
 ち〜あ〜あ〜あ〜あ〜ああああ
 ち〜あ〜あ〜あ〜あ〜ああああ

愚の一ふふふ〜あ〜あ〜あ花のあ
 ち〜あ〜あ〜あ〜あ〜ああああ
 あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜ああああ

若水やそけいもきりて雲信也

一切経持護乃思ひ起し

欠子大勢願の経持護存也

以清もろくぬま持多まへ初男出

大藏經護の志願漸く一巻の

巻紙むくきり

雖乃何れもいとおふまへ口く將

渺先まへ

金澤も浦つりまへ初 初 初

城乃松 さらさら さらさら さらさら

菊文の如し 吐し 吐し 吐し

万葉歌の如し 支度や 辻をたし

是れより 門を 築お 日暮前

植田氏切兜の如し けりて

大勢願の如し さらさら 男の子

たし 一や 名を書き 一 女文家

綿つゆのさかむらさきも脊やもちん
蓬菜の河変うね浦の東色や
浪つゆや當りしはひさし物さ
舟一着難考の強ささみり
破麩ちや水濁のこほき強
四り

多尾

爰に像のきし梅跡部つる如
多尾戸もこの新世並のうねり

うねりも響く馬城の回ちん草

福食なりそこの海やう年一男

初春の部

程赤城の散句書しとて

唐人の心お葉おほええ
筆始
目さまへた素こゑの如し
熱意又
分添も赤しや小猿身
うらま

角のこほりもあつた
あつたあつたあつた

—と古く(おまゝ)あらあめよ
み—この嬉—く

まの夢や昔を成る土産—と

永業障のまゝに成るおのまゝ

初夢やぬ—と—
鳥の編笠や陰にお—
冬ふも—おぬを—
姐の物風—おぬを—

後おぬを娘の手籠さぬ—

まあさむを何まゝを—

市は持出て来又代—

身過—
幣—
畑芥—
少—
先起—

立書く梅は数ふその日く那
う大旨しと老中ふお杖や几帳越
そふ多つや誰のあしハみねん

東寧府

有明の海は津々や梅の花

次峰の追悼

あさき方あさき方と梅のつり

仮初の交りも去るきの周りよ

とや病からぬ身ととあて西月

十日多尾りし剃髪き鳥谷

あつゆく末既祝し

あつゆくつ乘むと梅乃白ひれ

仙惟釋迦此方叢生

うとあししと梅西よわひ茶

獨愴

闇なる白ひ無き人遠欺以

夢の神より又訪く

日西きもたふよやあはれ梅の花
里のうら見も暖より海を夢
あま夜四の宮の梅もさきさき
糸を引く人ま津波やみは梅
あうめは枝日無き空に風をり

日くら〜と

遠も好よ沙彌の木履やうめは花

字速暖やあまなつぬ東風曇
梅さるふ人のあまやや露のたふ
聞けけけ〜あまの〜あま 禁り免奈
たふあまや梅やま〜や自漢致化
是もあまたきこて物〜月〜あ
えろ〜あま〜あま〜あま〜あま〜梅
紅梅や岩根を〜らる 空作り

根岩伊藤氏の隠れあま〜

みも来ん常日こゝし梅初可

疎の納屋に舟とつたきこ

此とよと無柳あゝしや楫枕

木母寺の常立佛のこゝろ賢釋つ

あゝと人あつた心のあつた心

まよふまよふ波しあゝと人

徒しと友人あゝと人

古墳通柳年と人

人あゝと人あゝと人

日のあゝと人あゝと人

象下しと人あゝと人

空那象と人あゝと人

窓と人あゝと人

家つと人あゝと人

春柳や蚕屋のうゝあゝと人

春のあゝと人あゝと人

たゞあまのこゝろに...
と聞けり...
人のあまのこゝろ...
あまのこゝろ...
あまのこゝろ...
あまのこゝろ...
あまのこゝろ...

大津繪のりけり...
あまのこゝろ...

新...
あまのこゝろ...

由誓子...
あまのこゝろ...

蚤、新乙女...
口林...
移り...
鶯...
沈...
うら...
あまのこゝろ...
あまのこゝろ...
あまのこゝろ...

黄多結 芳年 けりけり 根 けり 雲
宋 多 結 芳 年 けりけり 根 けり 雲
常 けり けり けり けり けり けり けり
黄 鷄 也 二 急 けり けり けり けり
けり けり けり けり 破 月 子 起 けり けり
けり けり けり けり 二 夜 寝 けり けり
母 結 無 けり けり けり けり 芳 野 駒 也
懺 法 の 過 けり けり けり 百 けり けり

地 けり けり けり けり 大 へ ぬ けり 教 生 の 梅
美 けり けり けり 梅 樹 けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり けり けり

此 也 聖 川 けり けり けり 伊 豆 人 也

神 けり けり けり

不 二 の 聖 地 けり けり けり 海 苔 の 味
薺 けり けり 割 けり けり けり けり

草一や小左のさあ〜一狐跡の

際つら〜雪ふるふ〜骨つら〜

多劫會の信人いふおやあつ

うね〜

薑一わさまり湯〜一雪乃味

空ゆ〜集りなかり男ふまは蓋

初芽の〜ぬ雌や落のたふ

えいいさぬ味いも〜一雪老ふ

和るらりさ〜や〜なは身練〜

おと程あ〜事〜土筆梅

狭ら〜及土まの茶葉やつ〜

蒲公英のふ〜あ〜何〜実あいを

雪の匂 桐と〜勢ハ山葵と那

椋菓亭

庖丁も目袋の手や木の芽時

いそぐぬと〜あ〜木枯の 時

兼のつまも書もの置く木のあつ那
朝日あつて旅路ありあつたよ
古刷毛のうしろに拭き録うんの家
と海の家はあつたあつたあつたあつた
まうちあつたあつたあつたあつた
閑静な何うに別業のうしろに
泡雪や海草のうしろに杖のうしろに

貞徳居士茶毘のうしろ

花のうしろ雪のうしろあつたあつたあつた
うしろのうしろあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

中村のうしろ

日のあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

海月の月なき阿蘇城のきつゝ
誰より来ると月や鮎子葉の風味
おろろ月老う袖ひく人よの好
莖 桐も名踏や新の鮎 丹
おほし海老や先ゆく人お袖巻燈
獲りしき小路くや海を語
落へや五月一兄きふふるや
書父への寢るを知らず製形の奈

廿九日

正月もあま禮彼岩ののりの難
海をきく人も正月海をきく奈
正月も先をきくまうて田施の好
正月の八月無きこの寒きこの好
おろろ子もわかしく梅枝の月よ
新くこの家の雪に踏かき木くさ
行燈舟出代りあは把針 葉

出さるるのひらき里路まつりさるる
出代もさるる世も手紙も
うさもさるる場の家敷もさるる
風の名も昔も如伊勢路 風
鷹色もさるるみるまもさるる
うのさるる乳もさるる彼もさるる
鳥居場のさるるさるる 以んて
涅槃會や片もさるる 山麓の香

新ちのさるるさるる 一つもさるる
ぬもさるる像珠もさるる 画紙も
阿もさるる先時もさるる 西りも

能上村

のさるる十代もさるる人さるる 蒸籠浦
主従のさるるさるる 長果も

十五阪

あさるるさるる 早着もさるる 花道も

素心志の存辨を傳へ海をこぼ
所の藩鎮ありしに薩長史の
ある月お臺の宮をたてし
一圃子おあまの御心
涅槃のるふりなり

陽炎の身成りては
洛外岡崎お世継氏の別荘をお

まゐりし

陽炎の身成りては
うけりふやん師の
加賀のふよやんお楓結めたる
陽炎やもをたてし人なり
うけりふやん師の

日暮淨光寺

人丸の宮ふき
うへおは魚一刺果

巢くまのり——新とんまりのまらふ

母為造物者に嗤

抱ふる子 堪ふなるらん 我々のれ

城中寸土如寸金

寸金の庭もあまの 舞ふ 堪

ふ舞や 行臺もあまの 往もる

燈るる——重くあまの——河くく——

狐もあまの 堪ふらん 堪ふる

茶園や 露もあまの 蝶もあまの 蝶

くくくまの 燈もあまの や 飛もあまの

似あまの——とんまりの 舞もあまの

もあまの 捨——あまの 舞もあまの 物もあまの

嘆もあまの 舞もあまの 初 蛙

あ——あまの 舞もあまの 箇の 舞もあまの

あまの 舞もあまの 舞もあまの 舞もあまの

舞もあまの 舞もあまの 舞もあまの 舞

水のまつわさるふや、蟻の子
一夜のうらみの響き清らかなる声

誠かなる

命をよみしらすききし響きし
分別を清きく想ひしりちるく
約中のこゝろ阿ふ中やたふし
西り能くしるくく鳴るめし
やう思ふし一毎ふまふし

聖馬のあつ物たりしや、海を
彼岸よりしるく聖物や露の
明ちる家根をききし雛子の声
こゝろぬれ子の性根やまゝに
南風をく濁る免や雛子の聲
灰小屋の山のあつるくも雛子の意
是れ子旅をききし誠思ひし
是過くも彼りしるくやぬれし

玄多也 晴々何事もさか ちよ
濡津まの舟場の李教さま
土門けし身も水燕何許も
都安ういや酒を語す庭座
兼 龍まは ぬふ阿さま 祝すの
来多 陽景 庭越や何千里
まゝに 舟も 馬も 舟も 舟も 舟も
鳴つて 舟も 舟も 舟も 舟も 舟も 雁

舟も 舟も 舟も 舟も 舟も 舟も
いよー 舟も 舟も 舟も 舟も 舟も
舟も 舟も 舟も 舟も 舟も 舟も
舟も 舟も 舟も 舟も 舟も 舟も
舟も 舟も 舟も 舟も 舟も 舟も
舟も 舟も 舟も 舟も 舟も 舟も
舟も 舟も 舟も 舟も 舟も 舟も
舟も 舟も 舟も 舟も 舟も 舟も
舟も 舟も 舟も 舟も 舟も 舟も
舟も 舟も 舟も 舟も 舟も 舟も

羈中

烟のりの出ぬ里も好く荒波山

松屋尾のま

鶴のりも田のりも好く小まつ川
ちり花居てもつ脊び不出種たも
なまもや歌をよみ結うけま
人とめて月も枸杞つか鹿の那
さしりもや灰汁の出るると少も枕
の伸る程もあけけ 薪汁

船文のり紙りふて灰汁出寸も好く
お化たちの薪好もよきま
明家の橋根子獨活の末生うま
菜能花もや庭のりも好く門徳寺
ちりも好くもよきまお巡りか
と葉のりもや出村も好く一花の板
ちり花ゆめのもよきまい二軒

ちりまの山

市井の心花より花よりの心花なりけり
 もの事し遊人初めて知れり
 知らざるも花も見えぬ 知れり
 梨島の志よりありて知れり
 曾く乃終れりや 知れり
 中身の尾をかく水ももて遊ば
 尖ら花より遊りあぐやらひりた
 うらむ白くもなる急な彌生さ

武士や離宮十ヶ所人の中
 難棚おるなり文もあはれ
 離るるや高はかき料理種

十軒店

ひる市一の雲ももたし
 曲ありやもたあはれ
 奈又や亭もあはれ
 海ももたし

寒乞のりや江乃葛の坊とまり
青新供也にきりけし一変のいり

あつきの十有牛久の記

雪のしりしあつきのあつきの
蘇のしりし牛もまけし一變のいり
きりけしあつきのあつきの
換おろ寸存加まつくや青新の
付子の紫新のしりし烟や青新の

まのしりしあつきのあつきの
春新の牡丹中きりの廣くこの
きりけしあつきのあつきの
信馬のしりしあつきのあつきの

年経るしりしあつきのあつきの

あつきのあつきのあつきの

深淵一甫のあつきのあつきの
あつきのあつきのあつきの

今海が箱館の港へすまへしその名

の芳うしやも胡沙う一本はさうら

ふちのまへりけりしうらまへし

面をあらはせし十八年の日徳戦と

るくはを敵艦たふしやうらこし

るありしやうらつるの栄へあり

はさしうらうらたふしやうらこし

と龍舟の梅は袂にふすまへりの梅

華をさしうらあはれやうらこし

東のふりうらうらの梅うらこし

十日節うらうら危るやうらこし

けせんうらうらうら期のうらこし

ふりうらうらうらうらうらこし

ちんうらこし

花過きし何ふあはれうらこし

永きうらやうら門を越しうら味

あつたや 温泉への飽く 滝より
何となく人々くくあつたはあふ
立やあき日浅くあふく思ひあふ
初人の斜 春の井のくあふ

平井 松應堂

あつたや 温泉への飽く 滝より
何となく人々くくあつたはあふ
立やあき日浅くあふく思ひあふ
初人の斜 春の井のくあふ

何の芽もあつたや 春の井のくあふ

巫山の夢もあつたや 春の井のくあふ

あつたや 温泉への飽く 滝より

何となく人々くくあつたはあふ

立やあき日浅くあふく思ひあふ

初人の斜 春の井のくあふ

あつたや 温泉への飽く 滝より

何となく人々くくあつたはあふ

波一初年より天と終終筆出

の(是)あつたふたは(中)一

いふ(中)は(中)は

翠人のまらうやあつた乳山

流と流(中)は(中)は(中)は

下(中)は(中)は(中)は(中)は

口(中)は(中)は(中)は(中)は

道灌山(中)は(中)は(中)は

口(中)は(中)は(中)は(中)は

美(中)は(中)は(中)は(中)は

金砂山

美(中)は(中)は(中)は(中)は

飛鳥山

人(中)は(中)は(中)は(中)は

木(中)は(中)は(中)は(中)は

た(中)は(中)は(中)は(中)は

花の葉の裏のうらみは水に花結る
露のぬれ花の葉のうらみは水に
花の葉の裏のうらみは水に花結る
花の葉の裏のうらみは水に花結る
花の葉の裏のうらみは水に花結る
花の葉の裏のうらみは水に花結る
花の葉の裏のうらみは水に花結る
花の葉の裏のうらみは水に花結る
花の葉の裏のうらみは水に花結る
花の葉の裏のうらみは水に花結る

草臥もさしむらさき色菊の
菊の口紅のうらみは水に花結る
菊の口紅のうらみは水に花結る
菊の口紅のうらみは水に花結る
菊の口紅のうらみは水に花結る
菊の口紅のうらみは水に花結る
菊の口紅のうらみは水に花結る
菊の口紅のうらみは水に花結る
菊の口紅のうらみは水に花結る
菊の口紅のうらみは水に花結る

山王山

一筆さく花や上野 雲より雨汁の
對塔老人の一周の秋をよむ若乃
花の葉の裏のうらみは水に花結る

死ぬるの誰か ともなきにあり

袋田村院三重あり

あはれなるもあはれなる 庵の香

萬事分改定

花鳥や何と人はいかに

藏經轉讀の筆跡

浅草寺のあはれなる花の香

らんらんらんらん 隅田川

——

あはれなる花も人はいかに

上野

あはれなる花も人はいかに

京師友人とあり

あはれなる花も人はいかに

送別

旅宿 花も人はいかに

飛鳥山

麓の下をくぐりて山頂に到る

乳哺庵頂のふもとにあり

とて其のふもとにあり

初山におもひにけり

ふもとにあり

とて其のふもとにあり

一瀉にけり

とて其のふもとにあり

花のつと旅をゆく人

三月御停止

所木戸もゆく人

とて其のふもとにあり

ふもとにあり

寸草川の中

山麓 花のつと人の出ぬ口

漸多境由親を母より何りし時

是出より士生の桶取えとまを

結ゆくや一と何り一昔今昔

すまひの控あはる深く海を言何處

二當り紙枕一と世の國一りり

けいこ

ふりてとと事や若り一旅や森とま

正像未和讀といふもよく讀とて

未法聖人より世何と花出りり

何某彦別業

花出りも諸代をくし一下を女

と一聖竹双説と何り一比朽木城

得て蕉翁の肖像を彫刻せんとす

とつと子梅木や山鏡ちの神亦不

しとく芳聖と何人いふとあつと

下一むあつと一とくも答

十三年三月廿五日 野原の春 神

墨田川

柳の梢に花の影をうつし 物なき
垣もささけさぬらん 奥や尾ひら
人の出上りや花の影をうつし
通ふもささけさぬらん 奥や尾ひら

矢野大原を遊りて

門院のちからむくも 通新

世にまはる花の影をうつし

母をささけ送り 瞬息のちから

いとまも過してささけまた 藤部

南の花もささけ送り

ちり残る梅の影をうつし

紙巻の讀

清やうき似し 白梅のつばき
風ぬく 柳の影をうつし 乃 麦の丈

秋はく 柳子人き 一あこの花
 連翹や 麓もあき 藤のこゑ
 きん翹や や 蝶の夢 一こゑ
 海棠は 夕けり 夕の 一お宮
 久しき 夢の 一いふふ 夢色
 海老も 夕の 夕の 夕の
 山里の 夕の 夕の 夕の
 夕の 夕の 夕の 夕の

夕の 夕の 夕の 夕の 松棋

夕の 夕の 夕の 夕の

夕の 夕の 夕の 夕の

夕の 夕の 夕の 夕の

夕の 夕の 夕の 夕の

夕の 夕の 夕の 夕の

夕の 夕の 夕の 夕の

夕の 夕の 夕の 夕の

~~~~~

~~~~~

春の柳~~~~
山吹の~~~~
~~~~

那須野

牛飼の~~~~

~~~~~

~~~~~

夕風~~~~  
狼の~~~~  
~~~~  
~~~~  
~~~~  
~~~~  
~~~~  
~~~~  
~~~~  
~~~~

物うの那須待也 梨の花

湖のほとりうららかに咲く

月の光に照らされ 西の空にほげ

ささ木枝に古の匂いよちよち

瀬田の白波よわかにたぎる

花の霞をくぐり 仙臺禱の夜

西の空に雲の影 松の葉を渡る

徒らな心よ 空をゆく

始まつていそぐ 春の梅の影

枸杞葉つむぎや 高麗の細さ

滝壺の餅 けしき 草花の匂

おろしき けしき 萩の葉 鶯のさ

春の空に 風を 門板のさ

日乃よきや 吉原のさ 女形の面

ふきよきや 燈の調法や 紅霜

月居る 矢内と 藤城の月を

小中殿村の河のふりかへに碑を建て

はるあまの那波ののちの友あつし  
いふまぢん風のとほりてあつし  
あまのきつ子のあつしあまのきつ子の  
あまのきつ子のあつしあまのきつ子の

新橋屋追悼

あまのきつ子のあつしあまのきつ子の  
あまのきつ子のあつしあまのきつ子の  
あまのきつ子のあつしあまのきつ子の

新橋屋追悼甚之部

あまのきつ子のあつしあまのきつ子の  
あまのきつ子のあつしあまのきつ子の  
あまのきつ子のあつしあまのきつ子の

あまのきつ子のあつしあまのきつ子の  
あまのきつ子のあつしあまのきつ子の  
あまのきつ子のあつしあまのきつ子の

恙として見く縫あけおろす袷が  
有公浅師と申して書かす

上野山

淺仙の来りしつゝぬきぬき

浅草寺

花より草をけりしをきりし

淺草のり山にちかひに

灌佛や日々にわろ人の請ふ

花より草を長男も辨發

買十首

月よりふて二日おきたる

月よりふて一カと思ひし

深川岡倉堂橋を

とふ地名ありし一臺盤

椀藏ありし一変ありし

杜宇むしりの椀花もむし



四月十七日

安國殿御禮

郭公よりやほは旅の歌雜糅土  
氏家よりよきうて

郭公よりやほは旅の歌雜糅汁  
車井よりよきうて  
とやうて

とよはしよきうて

郭公よりやほは旅の歌雜糅汁  
とよはしよきうて  
蜀波山のよきうて

枕よりよきうて

郭公よりやほは旅の歌雜糅汁  
故郷初よりよきうて  
啼きよきうて  
杜鵑  
歌よきうて

多分とては、神を奉るに不如、  
寶を以て、橘の身、待たせ

坂本山王祭禮

濱りの神、與らば、子

上加茂のうら

係とて、藤のうら、や、祭、是、  
さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、  
掛、さ、さ、さ、さ、さ、さ、

杜、早、油、き、き、き、き、  
猶、さ、さ、さ、さ、さ、さ、  
世、中、へ、背、中、足、さ、さ、  
お、た、さ、さ、さ、さ、さ、  
う、ん、さ、さ、さ、さ、さ、

瀬の川

祭、さ、さ、さ、さ、さ、さ、  
葉、さ、さ、さ、さ、さ、さ、

上野

次も拾ひ鳩も空りふや櫻の実  
 山嶺の峰——とわくまの繁く丸  
 木映れ梅より出てあり春繁時  
 変革よまきあうもとの矢ぬの那  
 舟倉に人の出道の夜あり可奈  
 甘酒よこまきと梅のや木下音  
 常磐木のちる中よ芽とふまのりり

月、楓露多り提し初もりり  
 支ふや昌被のうぢやる 楓

病後

牡丹見よ出まは老々杖たのこ  
 うまのあのをちそ睨り——牡丹うま  
 茶ももる花よりまたは牡丹お  
 口ま——う菱のこりあしんこ  
 程のよき料理喰きほたんこ

芍薬や神合のる花 明り先  
芍薬花のりもち茶の 飴  
もり立——糖をのやふつと  
茶造の尻をを巾——杜 有  
うり——ま中を茶あり燕子花  
川りぬのち出寸毎のち供ふ  
川骨や鹽と丹の茶——  
川りぬのち茶漬もぎ——

日吉貞之丞鉢木

郊の花乃雪やさきく—— 謡 物  
郊路をり杵とく何の岩井くふ  
まの急やううあ—— 出寸難魚能  
う乃花やものり—— けちる蟻のこふ  
うの初のお花垣もあせり那  
おのまを水 墙やま—— 牛の角  
見ると寸や 橋の考く行 茶能能

たらしふの昔もやうや 児の袖  
楊おきかゝりて 仮信居  
立花もよむれをきりて 烏帽子折  
川谷城よりぬききりて 茨の花  
香もよむれ人や花のまをけりて 由

須磨

ありて世は夢のまをきりて やきりてのまを  
うらやみし数もよむれをけりて  
もの事始たりて 入りてやりの花  
急ぐりてやほか 人の養ひて

横津國江のまをきりて

人よありてやほか 人の養ひて  
香沈みて 逐劍光 飛青血化  
為原上草

花のまをきりて 花のまをきりて 美人の  
そよと人よきりて 洞を美人の

起くや牡丹や菫く菘ものもな  
竹のまはすや菘山もふもり  
竹垣子や廿日の書くや二三寸

大徳寺よりあり比

大徳寺のまはす竹垣子祖の尻

四月十四日二句

常も光くや菘垣子馬休菘  
菘のまはす菘垣子過たれり

菘垣子黄鳥もく光く  
標も光く菘垣子初松魚  
ものめよー新のつれやぬり文

堀内途中

道くや賽乃麦ころ  
かき過る人呼入亭新茶も  
堂中の園もなあるまん菘

左雨亭よおぬり

多の舞も祓もなまの阿やの酒  
 雨もや越つくりもなまの葛蒲も  
 盃もやこつくりもなまの茶も  
 まつ帳もなまの村の質屋も那  
 夜もなまの行家もなまの  
 あまになまの先もなまの辻も花  
 似もなまの舞もなまの阿もなまの  
 神風のなまの阿もなまの競馬

糸のけの麻のなまの麦の秋  
 麦のや宿の遊女の子の唄  
 五月廿五日の夜の中一亭

堀つたなまのなまの鶴と女もなまの  
 照志もなまの人のなまのなまのつ水鶴  
 菜もなまのなまのなまのなまのなまの  
 菅田もなまのなまのなまのなまのなまの  
 田貝もなまのなまのなまのなまのなまの

紺蒔のつばき〜〜〜

鶯の餌をさめてまけ〜〜〜鶯の籠  
北窓のほろろと夜たれや細干場  
ふきとけり市〜〜〜紺のほろろと様  
量出さるゝ羽つ〜〜〜羽の鶯  
鶯人よ小樽もさ替てから〜〜〜那  
ゆりまて強いとさる鶯返 井  
欠い〜〜〜鶯のひねり出の鶯

鶯つゝをや表にあり〜〜〜縄掛  
鶯の鳴く聲を祀〜〜〜舟  
葱冬花と見きる鶯の羽  
川筋のつ〜〜〜鶯の中  
小糸乃灯とま〜〜〜鶯の糸  
鶯よとさ養まつ児やほ〜〜〜籠  
りけ竿の綱をさ〜〜〜鶯  
月分を年〜〜〜鶯の刺繍や故郷



琵琶橋

月よき誠金深の故よき〜

うき墓糸

は〜つろ〜橋〜ら〜る〜

ふ〜む〜お〜お〜ぬ〜〜〜

路〜へ〜飛〜た〜き〜〜

病床

煩〜を〜挽〜る〜も〜故〜屋〜と〜つ〜

岩城小名溪

節〜ま〜き〜松〜魚〜や〜

吹〜き〜し〜し〜わ〜お〜も〜

馬の尾結 蚶の隙 糸谷越

柳〜〜〜荷〜籠〜へ〜

枝〜か〜を〜つ〜鳴〜や〜

うき尾

声〜ら〜る〜若〜乃〜

桑市のあゝ梅吉や 枝 桂  
蘭と出く阿多ふ 隈なき小塔は

御影堂由阿弥の制くは 城高き

のまじりともなはたは 井きく

許は 詠まの 昔小麻や 口 枝 尾

ものあゝく 昔津あゝ 控 麻る

山崎貴や 麻の 詠 井出の水

松 蔭中 詠 詠のあゝ 蘇は

丙午火災のち 建もつゝ ぬ 裏 住 居

のち

いふくく 蚊牙 思ひ 出寸 睦月 素

世は ち 詠 詠も 立 詠 やり 詠

一石橋を 通つた 詠 詠の

うきん 詠 詠 詠

可年 詠 詠 詠 詠 橋 詠 詠

晏 起

是をたそ目の片は樹子跡多  
ぬつ鼓川誰か八音の破樹  
神—— 寺に初まん出おの聲の穴

世のうらみ

蚊屋滞り故無人のまを焼きたり  
強引言し直まのや初と歸り共  
哘るま—— 穴と踐つて来刺の  
戸のうらむるまのこ—— ちよ

阿たあまきおまのまのり小盗人  
み—— 可と和湯菊糸のらま  
短夜や已、斬 跡耳お入  
み—— おおの路ちく明城垣一重  
見—— 可おまの急梅花の明にちり  
行 燦然ついとあまを交り月

旅交の何れも文と夏の月  
 終たの夕輝は持た友の月  
 浦の月を無おるくも河梨  
 春つのも月かかむくともあふ  
 瀬乃くみ道くや蛇霞を子  
 夜あぬよき一坂坂やついちこ  
 木霞を子や山伏も持たふあ  
 めく馬つあいて探寸舟出兵く形

古畑や柳の何れも花道よ

大森村

春梅や春く海く新のあ  
 あとも免や様も窓又炎ひ春

在爾亭

紫陽花月と春の草く薄葉は  
 阿ぢくわく春くぬ顔の小倉中  
 撫子と流たり春くや 塚 塚

瞿麦のちやこもお路身したるこりり

日中の焰熱とくくく

釣とく那須野とく

ふれうへち志遠近りおろのり

山古のねあけりや百合や壙の外

立錫宮

菅のの夜はけりりや神より前

世宣もや系ちるねるのちと出り

可使良無肉不可み世休

とくくくくくくくくくくくく

竹植てあやうくくくくくく

たあうくくくくくくくくく

二十年のあつ海きくくくく

あやうくくくくくくくく

又送りくく

山梔子の庭やそと途の小盃

徳を成す

あつた月あつたの花の色くさ  
引くや花のまふいつらま傳  
うきくさお三升ちかひれ養ひ  
うれぬくさうらぬさぬや早苗時  
沐浴してき立なへきまのりん

倣祖翁口物

あまのつとく 田うき立 暮るる

くたけのやまきま 越して田うき  
あまの門又待子乙女のまうら  
早乙女のとほりもきくや夜うに

最上あり

二宮の志まふと湯敷まあり

十七日麻布雑色を田うら

木さけけ花や五月の時  
あふあふぬき 何代五月や

あまのりやの燈の初多は 龍  
五月雨や油うりや川向ひ

須加川市原氏

まみまお焙煙にうけら桶の臭  
浮草阿やと吹く棹まは舟うな  
女覚の人も及まぬうき葉は

長岡芝山老人の薙髪

ま我のしとほもあまのやまを

おのゝ売んまお梢と蝉のたぐ  
幾と序や楓葉か目覚寸樹の兒

山行

あまの夜もあま淋しや蝶のこゑ

山王社

神の響に言旅の留まやせまの古亭  
あまのあまのあに秋と思ひあ  
明やあまのあまのあ照射あ

名越一泓の貫主よ何れたよみ柳

當よめをよきとぬめぬよらるるや

あゝぬか福のいふ事変りし

練きし子氷室めし口や法の袖

はむるも其のり何とまゝや

市中の蘭おほ臭や氷うり

六月十八日 目録

おららの琵琶まゝ書かぬ那

惠照律院

堅道和上阿毘達摩  
大毘婆娑遍智藏

云々々々々 法の何れ

いとさへ 暑き河原や

夜のあけ 暑き河原や

次は乃 時計

帆月 風の

吾妻森

鈴の 鈴



經名と云々大川と流しと多らぬ

の七世より能辨名と云々宗吉

らうらうと云々宗吉

あゝ風や亡魂をかく船の中

甲子のらうらうと云々

忍禮亭と云々

月すし代りもの縁の本堂

川床や柳舟うけ月涼し

あゝ計と云々月と門庭

月桂子と云々

暮もあて涼し祇園のさう婦切

人うと能えと云々河原さみよ

す風やねと云々の種もさつ

藏もはと云々の夕納涼

鶴のさうと云々の種光と云々

涼も是や梅と云々の此壁と云々

妙淳信女のまに浄土三昧経一巻

一巻を寫し一佃島の沖に流し置く

養く會當にけり多ん一信

風くもふ浄土や何変経さうし

干さきとる處を流るもや風薫る海

踏ありきの葉よあうねくや青 山

夕の空や自然枯葉のうたあひも

白菊やわらわ夜うし 山

雪の降波お陸や歩行し

久もねえぬ身横たらしし

山王神

物よりの棧敷よあねく祭の形

文雅の文はにみく神くしよ世姑

宗工たうし大梅老人の心悼

何事もしりさう汗をぬく心祭

祓治の舟は波きよお太

何ふらんしらの心

日吉氏月次

葛水のくけりもねや 襟能

摩訶僧祇律読

ねころ子能減力阿の婦人

岩のねのひさくは法

書

回向しる飲もくろき清水

しる多る當染うら白の岩根

ふいき奈は茶多をい

枕西衣を波をぬ清あ

山志美園飛鳥山形

角一海け照く

ろおの戸をんを

基留里を

手傳ふと雨

見り人跡なきも蓮響白ひきり  
 目のむけ雲ちりけりやまきの  
 あり本や溪千軒の墓 変  
 旋花と砂山暮しーこの阿と  
 飛ぶ影やたのむ木蔭もあゝ野々  
 びくほや家のもまきりぬ  
 夕顔やうしの我々つゝ  
 わふらふやうし人の方違ふ  
 夕顔や花の影もあゝ  
 お坐あやみ養木のまやか  
 麻布とあゝまきり  
 秋ちよふ柳のまや  
 秋をー葎のまきり  
 阿のまきりーまのまきり  
 形代や葎のまきり

Handwritten mark or signature at the top of the page.

Small handwritten text or stamp on the right edge of the page.

Handwritten text at the bottom of the page, possibly a date or signature.

Main body of handwritten text in cursive script, consisting of several lines of text.

